

エンディング業界のいまを届ける“問題提起型”業界誌

(株)はせがわ・新貝社長×(株)保志・保志社長
「仏壇の価値を問い直す」

月刊 終活 6

June 2025

vol.297

<https://butsuji.net/>



徳島県の仏壇メーカー
森正の「DX改革と位牌シフト」

漫画家カラスヤサトシ
「入棺イベント」で死を体験
日本の万博は「宗教」を
どう展示してきたか？

お仏壇 is not DEAD

どっこい生きてる 仏壇仏具の未来を問う！

僧侶が経営者になる時代へ 伝統×革新で挑む 寺院経営戦とは？

人々の声に耳を傾け、いま何が求められているのかを見極める。そして、そのニーズに応える取り組みを、持続可能な形で収益につなげていく。そうした、経営の知恵こそが、これからのお寺を支える力になる。130年以上にわたり住職不在だった天明寺を、20年かけて再建した鈴木辨望住職。その経験をもとに、全国の寺が抱える経営課題に向き合い、「お寺運営塾」や「オンラインサロン」を通じて新たな道を示している。

取材・文：福岡誠一郎



鈴木辨望(すずき へんもう)住職
1973年(昭和48年)生まれ。大正大学文学部卒業、文学修士取得。母の実家が天明寺近くの寺院だったことから、幼い頃より僧侶の仕事に親しみと関心を抱いていた。1999年(平成11年)、26歳のときに、師僧が兼務していた天明寺の住職となり、2004年には専任住職に就任。現代のニーズに即した運営で天明寺を再建し、その実績のもとに、経営に悩む全国の寺院に向けて運営・経営のノウハウを提供する活動を行っている。

上州名物の空っ風が吹き抜ける中、法螺貝の音が高らかに響く。その音は、遠くに臨む榛名山や赤城山にまでこだまするかのような、力強さを帯びている。冬至が近づく12月中旬。天明寺の護摩堂では、真冬の冷気を吹き飛ばすような熱気と炎が交差する祭りが開かれる。

その名も「柴燈大護摩供・白菜加持法要」火渡り大祭だ。境内に積み上げられた地元野菜「国府の白菜」の前では、護摩の炎が勢いよく燃え上がる。山伏たちは無病息災や

所願成就を祈りながら、火と煙を全身に浴び、素足で火を渡る。

「護摩堂と聖天堂を建て、この火渡り大祭を始めたのは2012年(平成24年)です。初回の参加者はわずか4人でしたが、今ではこの地域の名物行事になっています」

そう語る鈴木辨望住職は、天明寺をこの地域(前橋市池端町)の「へそ」にし、住民たちの心のよりどころにしたいという想いから、この祭りを始めた。

現在、檀信徒数は3000人を

超え、前橋市内でも屈指の寺として知られる天明寺。だが20年ほど前までは住職不在で、廃寺寸前の状態にあった。

住職不在133年 資産ゼロからの再出発

本堂は18畳、収容人数はおおよそ30人。境内も3分あれば一周できるほどの広さしかない。全国的に知られる「お寺運営塾のお寺」「お坊さんYouTube」べんもうさんのお寺である天明寺が、意外にもこ

ぢんまりとした佇まいであることに、訪れた人は皆一様に驚くという。

鈴木辨望住職が、133年間住職不在だった天明寺を専任で任されたのは、2004年(平成16年)、当時31歳の若き青年僧だった。当時の檀家数はわずか26軒。資産もなく、収益事業もなく、本堂や境内はかなり朽ちていたという。過去帳も残っておらず、辨望住職が最初に取り組んだのは、檀家を一軒一軒訪ねて挨拶し、「この寺に何を求めているのか」を丁寧に聞き取ってメモを取ること



お寺運営の講義にも、Youtubeチャンネル「丸儲け住職」にもインターネットをフル活用。

だった。「こんな寺に来て気の毒だ」と同情されたり、「高額なお布施を請求するなら檀家をやめろ」と警戒されたり、歓迎の言葉はほとんどなかったという。それでも落胆することなく、檀家名簿を作り、聞き取った内容をもとに「誰が何を求めているのか」「どんな不安を抱えているのか」「一つひとつ記録し、丁寧に応えていった。そうした積み重ねが、少しずつ信頼関係を築く土台となっていた。

この地域では、「どこかの寺に所属していないと葬儀や供養ができない」という文化・習慣が根強く残っている。そうした背景もあるからか、次第に「遺骨を納骨できない」「遺骨の保管場所に困っている」といった相談を受けるようになった。そこで天明寺では、年間1万円で遺骨を一時預かる取り組みを開始。参拝者が増え、お寺や住職との信頼関係が生まれれば、法事や護摩祈願などへとつながっていく。

こうした地道な取り組みと住職の誠実な人柄は、檀家のみならず地域の葬儀社や石材店にも口コミで広まり、「天明寺さんに頼めば大丈夫」という評判が少しずつ浸透していった。法要や祈願、悩み相談の場としても頼られるようになり、やがて地域の中核寺院としての存在感を確立

していく。

実体験から生まれた「お寺塾」 寺院経営の新たなカタチ

一方で辨望住職は、自身の成功実績が他の経営難の寺にとってビジネスモデルになると考え、寺院経営のノウハウを体系化。2022年に「お寺運営塾」を、2023年には「成功する寺院運営」を立ち上げ、経営に悩む住職たちを対象にセミナーを開始した。

「お寺運営塾」はオンラインと対面の両方で開催され、依頼があれば寺院に赴いたり、電話で個別相談に応じたりもするコンサルティング形式だ。「成功する寺院運営」では、経営のヒントや実践的なポイントを毎日、情報発信している。現在の会員数はおよそ100名にのぼる。両プログラムに共通しているのは、「自坊の強みを知り、弱点を改善すること、収入を増やし、支出を抑えるべき」という明確なスタンスだ。

辨望住職は、檀家との関係性を築くうえで基本として、自ら実践してきた名簿管理や、イベント・教室の参加者リストづくりの手法を紹介。それらを「資産」としてどう活用し、信頼を育てていくかを伝えている。

また、収益性向上に関するアドバースも積極的に行う。たとえば、カ



※YouTubeチャンネル
「丸儲け住職」

たな会館の建設も進んでいる。
「ここに集まった人同士が、自然に
つながっていく。天明寺が地域の
結び目となり、いろんな縁がめ
ぐつていく。それが、私が思い描く
理想のお寺の姿です」
そう語る鈴木辨望住職は、今日も
その理想に向かって、一歩ずつ着実
に歩みを進めている。

真言宗豊山派 太子山 天明寺

江戸時代前期に開創。厄除けや学業成就などの祈願を受け付け
る場として、地域の信仰を集めてきた。寺子屋も設けられており、明
治期には群馬郡中央部で唯一の尋常高等小学校の機能を担って
いた。しかし、同校の廃校後は住職が不在となり、130年以上無住
の状態が続く。その間は周辺の寺院の住職たちが交代で管理を
行ってきたが、2004年(平成16年)、鈴木辨望住職が専任就任。

天明寺の火渡り

毎年12月の第2土曜日。天明寺の護摩堂前では、
「柴燈大護摩供・白菜加持法要～火渡り大祭～」が行
われる。焚き上げられた護摩の炎は、本尊・不動明王
の清浄な火とされ、煩惱や悪い因縁を焼き尽くし、
人々の心身を浄化するものとされている。山伏たちは
無病息災や所願成就を祈願しながら、護摩の火と
煙を全身に浴び、素足のまま火の上を渡っていく。こ
の火渡りには一般の参加も可能で、毎年チャレンジ
する人も少なくない。その噂を聞きつけ、年々、他地

域からの参加者も増えているという。

当日は、仲間の僧侶による大道芸やマジック
ショー、地元農家による野菜の直売、屋台やキッチン
カーの出店などもあり、境内はさながら縁日のよう
な賑わいを見せ、冬の冷気を吹き飛ばすような一日
となる。

まだ始まって10年余りの催しだが、この火渡り大
祭は、いまや前橋周辺において“冬の訪れを告げる
風物詩”として定着しつつある。



再建20年を体系化し 地域のへそになる寺へ

こう話す辨望住職だが、こうした
講義を企画した背景には、もうひと
人
「皆さん、簡単に、すぐにでき
る『秘訣』のようなものを知りたいが
ります。でもお寺の状況は一つひとつ
違う。基本を押さえてまず行動し、
経験が積まなければ何も見えてきま
せん」

フェイイベントの開催は地域貢献や
認知度向上のチャンスになるが、
「開催するだけでは収益にはつな
がない」と言う。「参加者との関係を
どう紡ぎ、どうマネタイズするかを
考えないと、ずっと赤字のままで
す。資金が尽きれば続けられない。
情報発信も、広報と収益化の目
的を明確に分け、全体像の中で設計
しないと、持ち出しばかりになっ
てしまいます」

さらに、墓地・霊園の管理会社な
ど外部業者との関係にも触れ、「寺
院が主体的に運営体制を構築しな
ければ、かえってリスクが増す」と注
意も促している。とはいえ、実際に
講義を行ってみると、人を指導す
ることの難しさにも直面している
そう。教わったことを行動に移さ
ず、実践しないまま方法論にとらわ
れてしまう例も多い。

講義を企画した背景には、もうひと

つの意図があった。それは、自分自
身がこれまで取り組んできたこと
を、あらためて体系的に整理するこ
とだった。檀家26軒という状態から
スタートし、約20年かけて天明寺を
再建。今では群馬県内でも指折りの
寺として知られるまでに成長した。
その軌跡を振り返り、試行錯誤して
きた中で何が功を奏し、どんな要素
が成果につながったのか――。それ
を講義のカリキュラムに落とし込み
ながら、客観的に検証し、まとめた
ものをいざ書籍として発刊する。
自らの経験を一度見える形にして
おくことは、次のステージへの足が
かりにもなると考えている。

宗教者として、神仏を背後に持ち
ながら活動するという立場を活か
し、悩みを抱える人が寺に足を運ぶ
機会をどうつくるか。それこそが、
多くの寺院に共通する課題であり、
言い換えれば、かつて日本中の村で
住職が担っていた「地域のへそ」とし
ての役割を、いま再び取り戻すこと
でもある。

天明寺では、実際にその実現を進
めてきた。本堂のすぐ隣には、護摩堂
と聖天堂を建立。護摩堂内には、テ
ノール歌手・秋川雅史氏が制作・奉納
した『八臂辯才天坐像』が祀られてい
る。さらにペット・動物供養墓を設け、
現在は葬儀や法要にも対応できる新

ペット供養も行い、遺骨を動物供養地蔵尊に見守られる墓所に合祀する。

